法政大学学術機関リポジトリ
HOSEI UNIVERSITY REPOSITORY

PDF issue: 2025-01-15

【図書紹介】『ヘーゲル哲学入門』（滝口清榮著　社会評論社　二〇一六年）

Katayama, Yoshihiro / 片山, 善博

(出版者 / Publisher)
法政哲学会
(雑誌名 / Journal or Publication Title)
法政哲学 / 法政哲学
(巻 / Volume)
14
(開始ページ / Start Page)
69
(終了ページ / End Page)
69
(発行年 / Year)
2018-03-20

【図書紹介】

『ヘーゲル哲学入門』

（滝口清榮著　社会評論社　二〇一六年）

片山　善博

本書は、「入門」とあるが、入門の見かけをとった専門書である。もちろん体裁上は、一般読者が想定され、読みやすさを目指し、文体の工夫もされている。また注釈や参考文献の記述もできるだけ抑えて、本文だけ読めばわかるように書かれている。しかし、本文を読み進めていくうちに、読みこなすことが一筋縄にいかないことに気づく。ヘーゲル哲学への導入ということだけでなく、ヘーゲル哲学の最も深い内実に切り込んでいるからだ。さらっと読むことができる反面、注意を怠ると、大切なことを見落としてしまう。専門的な研究者にとってもさまざまな発見が可能なのだ。

滝口さんといえば、一九八〇年代以降、ヘーゲル研究会（現「日本ヘーゲル学会」）の主要メンバーとして新しいヘーゲル像を打ち立てた立役者の一人である。それは、それまでの固定されたヘーゲルの像（国家主義者、確固とした体系を作り上げた者、現実をふまえない観念論者など）ではなく、時代と正面から向き合いながら、現実の問題に取り組み、体系に収まりきれない思想を生み出し続けたといった像である。

滝口さんは、これまで、ヘーゲル左派の研究をはじめ、イェーナ時代の「自然法論文」「人倫の体系」「体系構想」、『精神現象学』の研究、そして法哲学講義の研究などを通して、多くの論文を公表し、著作にもまとめられてきた。本書には、これらの研究成果が、ヘーゲルの生涯（青年期から晩年まで）と重ね合わされながら、凝縮されて示されている。と同時に、近年注目を集めているベルリン時代の「講義録」研究などにも触れている。逸話も散りばめられ、知らないことも多々あり、個人的に楽しむことができた。ただし、論理学の記述は少ない。確か滝口さんは論理学にも精通されており、本書ではその一端が示されているにすぎないが、いずれ論理学についても論文を書いていただけないかと思う。

滝口さんは、ヘーゲルの思想の核心を少しも損なわず、しかも、わかりやすく、適切な例をあげながら、説得的に説明される。滝口さんの読解の深さが生み出したものであるが、そうした表現を獲得するまで、多くの時間が費やされたのではなかろうか。一般の読者だけでなく、専門家にも熟読してほしい書物である。